

子どもたちの感情はどのように変化したか

— 教師の目からみた特徴 —

速水敏彦 丹羽智美¹⁾

問題

青少年による予想もできなかったような事件が頻発し、「心の教育」が叫ばれている時代である。しかし、彼らの心の有様に関して一部の知識人の独断的見解は多いが、普通の人々の目や多くの経験を通じた議論は少ない。

そこで、本研究では、まず、子どもたちの社会的行動の背後にあると仮定される感情（学問的には情動という言葉の方が適切かもしれないが、今回の研究は一般的教師を対象にした面接を中心に展開しており、会話の中で、一般的でわかりやすい「感情」という言葉を用いているため、論文でも一貫させることにした）の実態の特徴について検討しようとする。感情研究の流れからみると実験室的な研究は多いが、日常的な感情について捉えようとした研究は意外と少ない。しかし、感情研究が現実の問題に何らかの貢献をするためには、たとえ厳密さは弱まっても、日常生活の中での感情に接近しようとするのが大切である。

子どもたちの感情の特徴を知るためには、研究者が子どもたちを観察すること、子どもたちに調査なり、面接をして尋ねることなどが考えられる。第三者による観察は最も客観的な視点をもつことができる。しかし、長期間にわたって観察を続けることは困難で、どうしても短期間の観察結果となる傾向がある。子どもに直接、調査や面接を行なうことも正攻法ではあるが、語彙力や自己洞察力の低い子どもたちを混乱させるだけで妥当な回答が引き出せない場合も多いと思われた。

そこで、本研究では最もよく子どもの実態を理解していると考えられる教師との集団面接によってそれを明らかにしようとする。具体的には特に以下の3点について教師が子どもの感情の問題をどのように捉えているかを検討する。

①以前の子どもと比較して、現在の子どもの感情の持

ち方や表出の仕方の特徴はどのようなものか。

②現在の子どもの感情的な特質の原因はどこにあるのか

③現在の子どもたちの感情を望ましいものにする教育的働きかけとして、これまでどのようなことを実践したり、今後実践したいと考えているのか。

方法

被面接者 K市内の小学校6校、中学校6校の教師、小学校男性教師13名、女性教師23名、中学校男性教師20名、女性教師12名、合計68名

面接日時 平成14年8月中旬 面接時間は1時間～2時間

手続き 各学校に40代以上の教師を数名ずつ（男女ほぼ同数で）集団面接に参加するように依頼した。後日、各学校ごとに、数名の教師を1つの場所に集め、集団で面接を実施した。面接者側は適当に話題を切り替える役目をしたが、その他は非指示的で話を一定方向に誘導しなかったので自由な集団討論になった面もある。

面接に入る前に必ず一様に簡単な質問紙調査を実施した。調査内容の第1は今の子どもたちは昔の子どもたちに比べて、怒り、悲しみ、喜び、恐れ、驚き、面白いという感情を抱く頻度（内面的感情）が多くなっていると思うかどうかを次の5段階で評定させるもので具体的には 1. 今の子どもの方が少ない 2. どちらかといえば今の子どもの方が少ない 3. ほぼ同じ 4. どちらかといえば今の子どもの方が多い 5. 今の子どもの方が多い、という言葉で付した。第2は上と同一の感情について今の子どもたちは昔の子どもたちに比べて顔や体、声等にそれを表出させる傾向が多くなっているかどうか（表出的感情）を同様に5段階で評定するものであった。この場合、昔の子どもというのはやや曖昧であるが、その教師が新任の頃を想定してもらった。

質問紙は数分で終了し面接に入った。面接での質問の内容は先の問題で示したように主に①現在の子どもの感情の持ち方および表現の仕方の実態、②その変化の原因、

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

子どもたちの感情はどのように変化したか

③子どもの感情への教育的働きかけの3つであった。面接者は筆者であるが、常に一人一人の教師に定期的に尋ねていくというわけでもなく、比較的自由に発言してもらったようにしたので個人個人により発言量にはかなりの違いがある。相互に関連している内容なので面接者が指示を出す前に被面接者の方が次の内容について話している場合も少なくなかった。

面接中の会話は被面接者の許可を得てすべてMDに収録された。

結 果

I 調査結果

1. 全体分析

まず、各内面的感情の変化について、全体、小・中学校別、教員の男女別の平均値および標準偏差を示したものがTable 1である。まず全体についてみると平均値が今の子どもは昔の子どもと「同じ」を意味する3以上なのは「怒り」だけであり、残りの5つの感情は3以下となっている。つまり、「怒り」だけが今の子どもの方が頻繁に感じると推測されているのである。一方、他の感情については以前より感じにくくなっているといえるだろう。特に「驚き」の平均値は最も低く、続いて「喜び」が低い。

次に表出的感情について同様に整理したものがTable 2である。全体の傾向についてみると、ここでも「怒り」だけが突出して4以上という高い平均値を示している。「面白い」の表出は今の子と昔の子はほぼ同じと推測さ

れているが、他の4つの感情については今の子どもの方が表出も弱いと捉えられている。

2. 中学校・小学校別

小学校と中学校に分けた内面的感情の結果をみると「喜び」、「恐れ」、「驚き」で中学の方がやや高く、表出的感情に関しては「怒り」、「喜び」、「驚き」、「面白い」で中学の方がやや高い。このことは小学生で特に「喜び」や「驚き」の感情が生じにくく、かつ表出されにくくなっていると教師には認知されていることを意味する。興味深いのは、「怒り」という内面的感情について中学生は小学生に比べ、それほど多くなっていないとみなされているのに、表出が昔に比べてより多くなっていると推測されていることである。それに比し、「悲しみ」は今の中学生では小学生の場合に比べ表出する傾向が少ないとみられている。また、「恐れ」に関しても中学生は表出する傾向が少ないといえる。しかし、小・中学校間で差の検定をしたところ、「驚き」の内面的感情で有意傾向($t=1.806$, $df=65$, $.05 < p < .10$)が見られたにすぎない。

3. 男女別

被面接者の性別に注目してみると、概して女性教師の方が男性教師に比べて昔より内面的感情も表出的感情も多くなったと感じる傾向がある。特に大きな違いがみられるのは「喜び」や「悲しみ」である。これは感情の持ち方も表出も同じような傾向がある。また「驚き」に関

Table 1 各感情を抱く頻度の変化の平均および標準偏差

	怒り	悲しみ	喜び	恐れ	驚き	面白い
全 体	3.67 (0.93)	2.85 (0.83)	2.61 (0.76)	2.82 (0.98)	2.45 (0.63)	2.78 (0.88)
小 学 校	3.71 (0.99)	2.89 (0.87)	2.60 (0.74)	2.71 (0.99)	2.31 (0.53)	2.80 (0.90)
中 学 校	3.61 (0.88)	2.81 (0.79)	2.63 (0.79)	2.94 (0.96)	2.59 (0.71)	2.75 (0.88)
男 性	3.53 (0.86)	2.63 (0.56)	2.52 (0.81)	2.80 (0.89)	2.45 (0.62)	2.65 (0.84)
女 性	3.78 (0.99)	3.03 (0.97)	2.69 (0.71)	2.83 (1.06)	2.44 (0.65)	2.89 (0.92)

() 内の数値は標準偏差

Table 2 各感情を表出させる傾向変化の平均および標準偏差

	怒り	悲しみ	喜び	恐れ	驚き	面白い
全 体	4.09 (0.96)	2.92 (1.09)	2.73 (0.96)	2.76 (0.91)	2.46 (0.84)	3.00 (1.03)
小 学 校	4.06 (1.00)	3.03 (1.10)	2.66 (0.97)	2.83 (0.92)	2.42 (0.78)	2.97 (1.01)
中 学 校	4.13 (0.92)	2.81 (1.08)	2.81 (0.97)	2.68 (0.91)	2.50 (0.92)	3.03 (1.06)
男 性	3.87 (1.01)	2.73 (1.05)	2.71 (0.97)	2.80 (0.85)	2.23 (0.56)	2.87 (0.96)
女 性	4.28 (0.88)	3.08 (1.11)	2.75 (0.97)	2.72 (0.97)	2.67 (0.99)	3.11 (1.09)

() 内の数値は標準偏差

しては表出について男女差が顕著である。男女間の有意差の検定をしたところ、「悲しみ」の内面的感情 ($t=2.065, df=57.276, p<.05$), 「悲しみ」の表出的感情 ($t=1.745, df=64, .05<p<.10$), 「驚き」の表出的感情 ($t=2.288, df=56.859, p<.05$) で有意差が認められた。

II 面接結果

1 感情の持ち方や表出について

①怒り

「今の子はすぐに怒る」という見方が多くの教師から出された。それは全員というわけではなく、極端な子どもの数が多くなったということのようである。以下の記述で () 内の記号は個人を示す。「以前も消極的な子と積極的な子の両方いたが、大部分はノーマルな子、しかし、最近は何極が増えた (H1B)」「社会性のできていない極端な子が増えた (E5B)」のような発言があった。また、言葉の上でも、「小学1年生から『むかつく』という (E4B)」「『最悪だ』という (E4E)」のように怒りの心情をしばしば表現するという。

具体的に教師に対する怒りとしては「用件をいきなり言って、それに先生が反応できない場合、『シカトかよ』といって怒る (H1A)」「明日は水泳をするから水着をもって来るようにいっておいて、当日都合で中止すると、『先生が言ったからもってきたのに損をした』というような調子で怒る (E1B)」などがある。その背景として、今の子どもの「常に自己中心でありたい (H1B)」「子どもが王様のようになってきた (H3B)」「気持ち不安定 (H6E)」「我慢ができない (H3D)」「セルフコントロールができない (H2E)」「忍耐力がない (E3C)」などの特質があるという。怒りの感情表出としては「壁をける、物にあたる (H1B)」「椅子をもちあげる (E1D)」「テストの点が悪くて机やカベを蹴る (E3C)」「すぐ手が出る (E4A)」「ぶっ殺してやると平気で言う (E2A)」「『ウザい』といって話を聞こうとしない」などがある。このような怒りに対して教師が注意した場合に『『すぐ悪者にする』という (H6E)』『自分だけが怒られるという被害妄想がある (E4A)』となる。

しかし、「実際には怒っていないし、キレていない。ただ、怒りを表現した方が助けてもらえ、楽だから (H2F)」という見方や、怒りの表出そのものを抑えていると捉え、「怒り、不満をもっていても我慢している子が多い、出してしまうとトラブルのもとになるからいけないと思っている (H5A)」と大方の人とは違う見解もある。

怒りの方向としては一方向的であることが多いよう

ある。「怒りがぶつかりあうことは少なくなった。どちらかが一方的に怒って仕掛けて、相手が泣く (E5E)」「関係が壊れるのが怖くてぶつかろうとしない。でも怒りの感情をどう出していいかわからない。だから物を隠す、仲間外れにするなど陰湿なことをする (E4E)」

しかし、教師たちはその子どもの怒りが「それが個性で片付けられてしまう (E5C)」「人と違うところをよさと思っている (E5D)」と怒りが拡張することを懸念している。

②悲しみ

悲しみに関しては今の子どもはあまり悲しまないとみている教師が比較的多いことが以下のような陳述でわかる。「昔はペンや眼鏡、お金を落としただけでも悲しかった。今は代わりがすぐに手にはいるから悲しまない。試合に負けても表面的な悲しみですぐに立ち直る (H1D)」「成績が悪くても悲しまない。通知票をみせあう (H1B)」「エイズ教育に『マイフレンドフォーエバー』という悲しい映画をみせた。昔は泣いていたが、今の子はしらけている (H6E)」「今の子は運動競技大会の結果が出た後の感情が淡泊、昔は負けたら泣いたり落ち込んだりした。今はさめている。これは勝った場合の喜びの大きさにもいえる (E2B)」「悲しいこと、泣いたことを書かせると、今の子どもはずいぶん記憶をさかのぼらないといけない (E2B)」「以前の1年生は皆の前で本読みをする時、読めなくて泣いていたが、今の小学1年生は泣かない (E2C)」「卒業式に泣く子が減ってきた (E1A)」

しかし、逆の見方をする教師たちも若干いた。「今の子は悲しみや恐れは多い。少しのことで悩んだり、友人が作れないといったことを教師に訴えてくる。こうして欲しいのに皆がしてくれないと被害的にとらえている、悲しみを隠す子もいるが、一般には出しやすくなっている (H5E)」「表現しやすい雰囲気になった。しかし、押さえ込んでうまく表現できない子も増えてきた (H5B)」「交通事故で急死した子の葬儀に多くの生徒がかけつけた。棺の中の子に話しかける生徒もいた。絆がなさそうに存在する。必ずしも悲しみの感情が希薄になってはいない (H6C)」

一方、悲しみの感情を表出するにしろ、しないにしろ、今のこどもは集団規範をずいぶん気にして表出するか否かを判断しているとの視点もみられた。「ここで悲しかなかったら友人ではないと思っている (H6B)」「皆の前で自分が外れた感情を示すのではないかと表に出さない (H6E)」

そして「怒りは自然にでてくるものだが、悲しみは生活体験、想像力がないとでてない (E2B)」、また「悲し

子どもたちの感情はどのように変化したか

まずに責任転嫁するからがんばれない (H1D)」「悩みに向き合って悲しむのではなく、取った物を人にあげるなどの代償行動に出る場合もある (E5E)」との感想も述べられた。

③喜び

喜びの感情に関しても相対的にはあまり感じなくなっており、表出も少なくなっていると述べる教師が多くみられた。「喜ぶのは体育大会や合唱コンクールで賞をとった時、それも周りの目を気にしてあまり大げさに喜ぶことはしない。うれしがするようなことを言ってもあまり喜ばない (H5A)」「昔は調理実習で作ったものは、どのようなものができておいしいと言って食べたが、今の子はまずいと言って捨ててしまう。自分たちで作ったという喜びを感じていない (E3A)」「ゲームで勝った時に喜ぶ。しかし、盛り上がることが少ない。冷めている (E4A)」「水泳大会で勝った時、喜びが持続しない、すぐに冷める (E5E)」「勝っても本当はうれしくないのではないか。心から喜びがでるのは、背後に苦労があるから。本当に感動しているわけではない (E4F)」「『やった』としか言わない、喜びの表現が一緒、体で表現するのは苦手 (H6A)」

一方、子どもの喜びの感情が感じられる場合も指摘された。「認めてもらえる時、喜ぶ、その経験がないから、薄っぺらな同情でも喜ぶ (H6B)」「少しほめてやると喜ぶ。しかし昔の方が反応は素直。周りを気にして喜べない子がいるから人名を出さずにほめている。それだと素直に喜んでくれる (E3D)」「高学年でも白々しいと思えるようなほめ方をしても、心の寂しい子(怒りを表出する子)は喜ぶ。心が満ち足りている子は喜ばない (E4A)」「ゲーム的なことをすると喜ぶが、やり方を考えないと全然喜ばない (E3D)」「喜ぶのは、誰かが失敗した時 (H6A)」

だが、今の子どもたちはたとえ内面的に喜びの感情がめばえてもそれを抑制しているとの指摘も多く述べられた。「感情に規制をかけている。たとえばディベートをやらせた時、勝った斑のリーダーは『喜ぶのは負けた子に失礼だからやめよう』といった。大人が子どもの感情をコントロールしすぎてだめにしている (E4E)」「年齢が上がるに従って感情を出さない。しかし、たとえばこんなことがあった。学級通信で名指しでほめた。実際私への反応はなかったが、その通信が母親の目に留まるように家庭で机の上に出してあったようで、ほんとうはうれしかったんだと知った (E4F)」「私(教師)がうれしがっていたら、子どもから『大人げない』といわれたことがあった。本当は子どもは喜んでいてもあ

るが素直に表せないようだ (E5C)」

このように言葉や表情で喜びを表現するのを抑制するようだが、文章には表現しやすいという。「文章になら素直に書く。表情には出さない (E4A)」「水泳指導でほめられたことを日記に書いてきた。感じる心はもっているが、高学年になると出しにくい (E4G)」

④恐れ

「恐れ」の感情が少なくなってきた。闇の怖さ、死の恐怖をあまり感じなくなった。家の中が真っ暗になることはないし、テレビでもゲームでも死をアクションとしてよく目にしているし、それを簡単にリセットできるから (H3D)」「恐さ、恐れが少なくなっている。怖いもの知らず、世の中がそうになってきた。自然など大きなものに対する脅威がなくなってきた (H4E)」「今の子は何も恐くない。昔は先生、父親が怖いと言っていたが、今の子は警察まで恐くない。大人が子どもを叱らないためだろう (H4B)」「親・教師への恐れは抱きにくい。遠慮がない、失礼なことを失礼だと思っていない (E2B)」「日常生活における規範に対する恐れがない (E2B)」

上記の陳述は最近の子どもたちが恐れを抱きにくいという見解だが、別の見方もある。「友人、先生の顔色をうかがう。周りにあわせておかないと心配という子は多い。これも恐れではないか (E2C)」「自己防衛的な恐れは強まっている。特に女子は友人関係でいかに自分を守るかに心の大半を費やしている (E2D)」「プライドが高く失敗を恐れる。完全にやれることしかやらない (E5D)」「低学年でも女の子は挙手をしない。能力は男子より優れているが、どう思われるかを気にしている (E5B)」「新しいことへの恐れは多い (H6B)」

⑤知的好奇心・驚き

驚きという感情については知的場面での驚きに限定された、知的的好奇心についての見解が大部分であった。だが、この感情についてもあまり感じていない、表出もしていないとする見方に要約される。「ゲームやテレビを見て体感しているから、よほどでないとき驚かない (H4B)」「今の子のように好きなことばかりやっていたら自分の枠を超えられない。覚えることはいけないという人もいるが、ある程度は覚えないと好奇心をもつに至らない (H4A)」「情報が溢れているのでおもしろがらない。昔は筋道を立てて先生が話をすると驚いたが、今は既に塾で教えてもらっている (H5D)」「以前、中1は英語の授業中、生き生きとして活気にあふれていたが、小学校から英語を習っている今の中1は新鮮味を感じていない (H5F)」「知的好奇心を感じるのは限られた子、知

識のある子であり、その割合が少なくなってきた (E2D)「昔は手品をするとその種を教えてほしかったが、今の子は『ふーん』とって通り過ぎてしまう。好奇心はない。食らいついてくるということがない。飽食の裏返しか (E2B)」「知的好奇心を外に出すのを抑える。知識が豊富な子がいるからその程度のことを言うと馬鹿にされると思っている (E5F)」

⑥面白さ

「特に表面的な面白さ (くだらない洒落、おかしな顔、恰好) にはすぐに反応する (E1B)」「子どもが面白いと感じるのはバラエティ番組と同じ。そのような場面がでてくれば笑っている (H6D)」「CMのパクリで笑わせる (E2B)」「人を信頼する、人のためということが根底にあるのではなく、面白さ、冗談半分ということが先行している (E3C)」「これらはいずれも今の子どもたちが、軽くて表面的な面白さに反応しやすいことを指摘している。一方、笑いが少なくなったことを示唆する発言もある。「面白いということにはしらけている (H6A)」「クラス全体で笑うことは少ない。教師側の面白と感じることが変わってきたのか (E2B)」「高学年は先生のダジャレに『さむい』という (E2C)」「ジョークより失敗で笑ってもらっている (H6A)」

⑦感動する

感情の種類にはないが、知的好奇心や驚き、喜び、悲しみなどの感情の動きを意味する「感動する」ということについて語られた部分も少なくなかった。今の子どもも昔の子どもと同様に感動しているという見方とあまり感動しなくなったという2つの見方が存在した。まず、前者の立場として以下のような発言があった。

「人の生命に関わること、身内の幸不幸のような身近な話に感動する。また、先生自身の体験談にもものつてくる (H2C)」「わかる授業であったとき、感動、喜びを示す (E1B)」「野外生活などの大きな行事で連帯感を味わえば、感動を味わっている。表情にはあまり出さないが作文や日記を読むと感じていたことがわかる (E1D)」「めだかの血流を見せたとき感動した」「かえるの解剖で動いている心臓をみて感動する (H6A)」「生活科で私たちがはっとするような変化をみつけて教えてくれる。子どもってすごいと思えるから、子どもの感じる心は変わっていないのではないか (H5B)」

一方、感動することが少なくなったという意見として「ものがあふれていて心が動かないから感動が少ない (E4A)」「今の子どもは『誕生日プレゼントに何か欲しいものがあるか』と聞かれても『別に』と答える」「感

動、感謝は少なくなってきた。しかし、単純で原始的で低次元な感情は大げさになっている。高次の感情は少なくなってきた (H2D)」

今の子どもは感情を出し切れていないので教師が仕掛けて感動させる場をつくっているという話もでた。「退院して来る子をびっくりさせようと計画し実行するとその子が感動した。また、その子たちが自分の結婚記念日にお祝いをしてくれ、私が感動した (E1E)」

⑧その他の感情

以上のどの感情にも属さない感情で意見が述べられたものとして次のようなものがある。

「子どもの名前がなかなか覚えられず、間違っって呼ぶとはっきり嫌悪感を示す (H6A)」「意味不明、理解不能という言葉をよく使う。言われた方には拒絶感がある (E2D)」「鈍感、気が利かない、周りの子が何をしていても関係ない (E1D)」「今の子には恥ずかしさがない (H1B)」「成績に過敏に反応する、勉強のことで悩むのではと心配 (E3C)」

その他に子どもが叱られた場合に示す感情や行動が共通の話題になり、次のような見方が述べられた。「規範意識が多様化しており、なぜこんなことで怒られるのかわからないという子がいる。保護者にもその傾向がある (H5D)」「昔は悪かったことは認めていたが、今は呼び出ただけで自分を閉じてしまう。そこをこじ開けて悪いところを直させるまで時間がかかる (E5F)」「ごめんなさいが言えない。まず、すねる。認めない、回避する。『自分だけじゃない』という (E5B)」「叱られ方が下手。ごめんなさいが言えない。プライドを傷つけないようにしているのだろう。(H6D)」

⑨感情表出一般について

「今の子は周りをみながら反応する。感情を出さないようにしたり、考えないと言う空白の状態をつくる (H1C)」「感情表出は少ない。しかし、怒りは爆発させる (H2C)」「共働きで幼少期に親とのスキンシップがとれてないという環境の子が増えてきた。だから自分の感情をはっきり出せない (E1C)」「運動会の表情をみてもあまり表情に出していない (E2C)」「感情を表出できない子が増えてきた (E2B)」「友だちにあわせる子が多い。一人だけで喜んだり泣いたりしているのは恥ずかしい (E2C)」「卒業式に泣かなくなった。感情表現が下手なのか、こみ上げるものがないのか、感情体験が少ないからなのか (E2A)」。感情表出と内面はかなりずれがあるという指摘もある。「まじめだが笑ったことが無い感情を出さない子がいた。しかし、あるとき、彼が他の子

子どもたちの感情はどのように変化したか

を傷つけるような嘘を平気でついたのには驚いた (E2C) 以上は感情をあまり出さなくなっているという指摘である。

しかし逆の見方もある。「感情表現が大きくなった。大して面白くないことでも面白いといい、がっかりする必要のないことでも傷ついたという (H2D)」「感情が薄っぺらになってきた。大げさに怒る、大げさに喜ぶ (H2G)」「ネガティブな感情をもつと物に当たる、意外な子がやっている。『家の壁に穴が空いている子』と聞くと結構な数の手があがる (H3E)」「感情の起伏が激しい。感情が衝動的で持続しない。昔は感情を表すことが好ましくなかったが、最近感情を表す子が多くなった (H4B)」

両者に属さない意見もある。「生徒の幅が広がっている。自分の行動を制御できない子も増えているし、自分を表現しない子もでてきている (H2B)」「学年の雰囲気に合わせて、素直に感動を出せる学年とそうでない学年がある (H3C)」「コミュニケーションがうまくない、感情の持ち方は一緒だが、感情コントロールや感情表出の仕方がうまくない。自分が嫌だと思った気持ちに凝り固まる (H5B)」

⑩感情語

今の子どもは感情を表現する言葉自体が貧困であるという指摘がある。「言葉が粗くなった。女の子でも『やべえ』と言う。また、簡単に『死ぬ』『消えろ』と言うようになった (H3A)」「女の子が『激ウマ』『てめえ』といった男言葉を使う (E5E)」「言葉使いは大人の鑑、語彙力が貧困になっている。『てめえ』『おまえらなあ』という言葉が優秀な女の子が日常的に使っている (E3B)」「『ウザい』『むかつく』に悔しい、悲しい、つらい、腹が立つが集約されてしまっているので、詳しく話を聞かないと感情が理解できない (H3E)」「感情と言葉が繋がっていない。どんな場面でも『イジメやん』という。つまり、面白くない、いやだを表現しているのだろう (E2B)」「思ったことをストレートにぶつけてくる。しかし、語彙が少ないから『むかつく』の一語で解決させてしまう。自分に不利なことは主張できるが、うれしいことは素直に出せない (H6D)」「語彙が少なくなっているから詩などの表現が下手、会話が少ない。世代の異なる人と話していれば使う言葉も広がってくる (H4E)」

2. 感情が変化している原因について

①家庭的要因

ここでは主に子どもたちの感情の変化の原因について

述べられたことをまとめている。今の子どもが「怒り」やすいことの原因について言及したのものとして以下のようなものがある。「今の子どもは甘え方を知らない、素直に甘えずに、反対の行動をとって関わって欲しがらる。基本的な人間同志の信頼感が欠如している。親にしっかり甘えていない。シカトに怒るのは見放される、振り向いてもらえないという気持ちの現れ。また、まともなものを3度食べていないために落ち着きが無く、すぐかとなる面もある (H1E)」「すべてを与えてもダメ、すべてを禁止してもダメ、キレる子は厳しい家庭か、甘い家庭、そのバランスをうまくとるのが親の役目 (H1B)」「今の子は扱いにくくなった。先生の言うことを聞かなくなった子が多くなった。核家族でしつけがなされていない。自己中心的、わがまま、甘えの強い子が多くなった (E1D)」「親の教師に対する気持ちが子どもに反映されている。親が学校、教師にいい気持ちを抱いていないと、子どももそのように反応する。そのような親が増えてきている (E2D)」「内面は大きな違いはない。しかし、自己コントロールを育てる場がなくなってきた。家庭でも学校教育の中でもしつけなくなってきた。自分自身がキレて怒る親はいるけれど、自信をもって叱れない。信念をもって育てていない。(H4C)」

また、豊かな感情が育たないことについては以下のような意見が出された。「気持ちを親に受けとめてもらっていない。親が子どもに感情表現をしていない。赤ちゃんの時からコミュニケーション不足。たとえば、最近ベビーカーに寝かせたまま、哺乳ビンでミルクを与えている光景をみた。また、子どもが学校で病気になり電話すると『一人で帰して下さい』『寝かしといて下さい』など淡淡とした受け答えをする親が多くなった (H6E)」「小さい頃から親と一緒にあって喜んだり感動したりした子どもは感情豊か、上手に友人のことも考えられる。そのような体験が乏しい子が増えてきた (H3D)」「親と一緒に感情体験をしてきていない (E2D)」

②学校要因

以下は子どもが怒りやすくなったことに対する学校側の要因を指摘したものと考えられる。「小さなうちに叱っておかなくてはダメ、小さい頃に受けたしつけが感情コントロールにつながる (H4C)」「昔は『ほめて育てよ』といわれたが、いけないことをいけないとしつけていないからそれでは通用しない (H4B)」「受験戦争をそのままにして幼稚園、小学校教育から変えていこうというのが間違い (H4C)」「先生自身が弱いから子どもが威圧的になる (H6A)」「感情を噴き出させることが大切で、担任がそれを止めてしまわずに聞くべき (E1F)」

子どもが一般に感情表出をしなくなった原因としては「子どもは変わっていないように思うが、先生自身が冷めてきているからクラスの子が感情を出していないのではないか (H6F)」というような見解が示された。

③社会的要因

社会の変化が関係するという意見としては次のようなものがある。「昔は子供会や近所、部落での遊び仲間があった。その中で礼儀作法や上下関係を学んでいった。地域全体で関わって同じ場面で生きているため家庭の外と内の顔が変わらない。しかし、今は外と内で違う場面がいっぱい出てきた。そのため、感情を表さないようなよそ向きの顔を教えられるのかもしれない (H1C)」
 「今は子どもも人権が保障されて好き勝手なことができる。わずらわしいから大人になりたくないという。今は我慢しなくても生活できる方法がいくらでもある。社会もそれを認めてしまっている。そのためちょっとしたことに堪えられない。ちょっとしたことでキレてみたり、コントロールできない。また逆に昔はちょっとしたことでうれしかったが、不感症になってきた (H4C)」
 「色々なことをやってもいいんじゃないか、色々な考えをもっているでもいいんじゃないかということと学校の価値観が守れなくなっていることが結びついて我慢できなくなった子どもが出てきた (E1B)」。子ども同志の遊びが減少していることそのものが感情形成に負の影響を与えているという指摘も少なくなかった。「声をかけあって遊ぶことがない。同じ場所にもゲームをやっている子もいれば漫画を読んでいる子もいる。やっている内容が違う (H3C)」
 「近所に子どもがいらないから集まって遊んでいない。遊んでいないから感情が育たない (E2A)」
 「コミュニケーションをする範囲が限られている。子ども同志で遊んでいない (E4D)」
 「皆で遊べない。物がないと遊べない (E4A)」
 「平日学校から帰ってから遊ぶことが少ない。習い事で忙しい (H6A)」
 「遊んでいる様子を見てみると、それぞれ一人ずつ木陰でテレビゲームや川遊びをしている。集団で遊んでいない (H6F)」
 「幼稚園、保育園で集団遊びをしてきているが、先生の目があり、先生の介入がある。大人がはいっているから子ども同志のつながりは薄い (H6A)」
 「今の子は遊びができない。何やったらいいかわからない。昔は勝手に工夫して遊んでいたが、今はこちらで教えないとやらない (E2F)」
 「友人同志で遊ぶことが大切。会話をするようになったりして何かしら違ってくる (H3A)」

④文化的要因

文化的要因としては次のようなコンピュータゲームや

テレビのことがあげられた。「コンピュータゲームの影響。すぐに反応しないとイライラする。鉛筆を回したり、貧乏揺すりをしたり、落ち着かない (H3A)」
 「子どもがテレビをみることのできる時間(午後4時から午後7時まで)に毎日のように殺人、恋愛ドラマ(大人向けのドラマの再放送)を放映している (H3B)」
 「部活をやらない子はそのようなテレビをよく見ている。部活をやっている子はうまく発散させている (H3C)」
 「感情的な面でテレビやマスコミの影響は大きい。殺人等の報道で簡単に人を傷つけたり殴ったりする (H1C)」

3. 感情を育む方法

次に教師として学校でのどのような活動によって感情を育むことができるかを尋ねたところおよそ次のような活動が有効であると指摘された。

①部(クラブ)活動

「生き方とか感情コントロール。その持ち方を学べるのは部活動である。目標のために辛くてもがんばった結果、喜びを味わう (H1C)」
 「今の子は人間関係が作れない。学校や地域でそのような機会が少なくなってきた。チームプレイの部活動はお互いにフォローしたり助け合ったりしないと成り立たないから、そのいい機会になる (H2C)」

②学校行事

「特別活動の時間を利用しての行事を通して子どもを育てる。協力しないと楽しくないし、成功しないし、うまくいかない。そのような集団での活動を通して協調性、思いやり、責任性を育てるという狙いがある (H1B)」
 「修学旅行で富士山の樹海探検にインストラクターの案内で行った。虫もいるし汚いから、いやがると思ったが、子どもに大好評であった。実際に体験させると虫に触れるのも楽しいことがわかる (H3E)」
 「子どもが樹海の自然に大感動した。子どもは体験が乏しい。小さい頃から体験していたら、違った感情がでるのかもしれない。樹海では自然に助け合うことができた。洞窟が真っ暗だからお互いに声を掛け合うことができた (H3C)」
 「野外学習は〇〇島がよかった。電気もない、何もなくてすべて自分たちでやる。一日中食事を作っているようだが、一生懸命やらないとご飯も食べられない。感性を掘り起こそうとするなら人間の生活の原点にもっていくといい (H5D)」
 「野外学習で生きている鶏を絞めて料理して食べた。命に接していくことで人の命を大切にすることができるのではないかと (H6E)」

③ボランティア活動

「自分が役立っているという気持ちがあるといい。通常子どもは存在感が薄い。そのような活動を通じて自分はここにいていいんだという気持ちももてるといい (H1E)」 「ジュニア奉仕団でお年寄りにやってあげて喜ばれたことに対してよかったと思い、喜んでいる。そのような経験が少なくなってきた (H2B)」

④縦割り活動

「6年が下級生の面倒をみる活動。存在価値が認められると感じられる活動。授業でほめられるのはまた別で、子どもの喜びの琴線に触れることが多い (E2B)」 「思いやりを育てるにはタテ割活動がいい。グループを作っているいろいろな活動をする。小さな子の面倒をみると思いやり、優しさが育つ (E3C)」 「6年生が1年生の世話をする。掃除の手伝いや指導をする。普段はささくれた子が1年生には穏やかに接している (E3B)」

⑤職場体験

「一日実際に職場に行き働いてみる。普段は実際に仕事をしているところを見ていないし、仕事を軽く考えているから大変さを体験するのはよいこと (H3E)」 「感情を育てるためには身体を動かして心を動かせることが必要である。たとえば下枝うち、牛の世話、農林体験。最初は嫌がるが黙々とやっている。一日終わると体育館に集まるが、その時の顔を見ると疲れはあるものの充実感のある顔をしている (H5B)」 「保育体験に行くと表情が優しくなる。小さい頃を思い出す。自分がわがままで子どもを育てることが大変なのがよくわかる (H6A)」 「自然体験学習で漁業体験をしたら喜んでやっていた。町を離れて過疎の島に行き、人との触れあいの影響が大きかった (H6B)」

討 論

1. 時代に伴う感情の変化

Hayamizu (2002) は戦後、怒りの感情が増大しているのに対して悲しみの感情が減少していることを、作文の分析、詩歌、映画の評論などから指摘したが、本研究のように教師の目から子どもを見た場合もおよそそのような傾向がみられることが示された。ただし、前者の論評は主に戦後の1950年代あたりと現在の比較を主にしているのに対して、今回は、教師が新任となった頃なので1970年代、1980年代が比較の対照となっていると考えてよからう。しかし、いずれにしろ、戦後から現代までのそれらの感情の量的変化は直線的と推測される。

「怒り」の感情が多く抱かれ、かつ表出されるように

なったのは何らかの経済的・社会的変化による心理的変化を仮定せざるをえないであろう。今回の教師との面接では、この理由として「子どもは王様である」とか「自己主義的である」ことが怒りの感情につながりやすいとの指摘が多かった。これらの指摘は一つの仮説として重要である。民主主義の自由の意識の浸透、豊かな社会、便利な社会への変化により、誰もが欲求を満たすことが容易になったことは大きな変化であろう。現在進行中の別の研究で、筆者らは現代の若者の多くが「仮想的有能感」とでもいえる根拠のない優越感のようなものを有していることを指摘しようとしている。このような「仮想的有能感」をもつことで自分に降り掛かった不幸な出来事について、有能な自分が原因ではなく、他者が原因なのだという認識を強く抱くことで他者への怒りが生じやすいように思われる。一方、「悲しみ」の感情はまず、自分の不幸にしっかり向き合うことが必要条件で、自分では制御できないものが原因と考えられる場合に深まるものと思われる。仮想的有能感をもつ人たちはそれを保持するためにも不幸な出来事を注視しない傾向がある。そしてさらに自分でコントロールできない原因だと推測しない。そのため「悲しみ」の感情は減少すると推測している。

本研究では、「怒り」以外のその他の感情の多くが以前に比べて減少していることが指摘された。これは巽岩(2001)のいう「感じない子ども」が増大しているという指摘と一致している。喜びも減少しているのは、教師たちが指摘していたように人との親密な相互作用が少なくなったり、日常的に苦勞しなくとも簡単に楽しみが手に入るためであろう。その意味では「喜び」という感情は「悲しみ」という感情を背景にした時、よりクリアになるものかもしれない。知的好奇心を含んだ「驚き」の感情の低下も学校生活の地となる家庭生活において、テレビ等を通して既に多様な情報刺激を受け、学校での情報提示に新鮮味が感じられないためであろう。「喜び」や「驚き」も時代と共に直線的な下降線を辿っているとすると何らかの心理的要因の変化も考えられるが、先の「仮想的有能感」で説明することは難しい。他の何らかの別の次元が必要にならう。それは知識に関するものである様に思われる。それこそ、精緻で豊富な知識を持つわけではないが、見たことがあるとか、聞いたことがあるといった極めて表層的な「仮想的知識所有感」とでもいうものが喜びや驚きの感情を弱体化させているのかもしれない。

2. 感情表出を抑える集団の力

感情表出について多くの教師が指摘したのは、感情表

出す際に仲間の様子を窺って表出するかどうかの決定をするということであった。感情は自然にでるものというような常識があるが、現在の子どもの世界では、感情すら出してもよいか見定めてから表出するというのは、現在の子どもたちの間で集団規範というものがいかに大きな位置を占めているかを物語るものであろう。こんなことで一人だけ喜んだらまずいのではないか、これきしひのことで驚いたら皆から馬鹿にされるのではないかというような懸念が常に存在しているといえるだろう。これはどのような心理的メカニズムで生じるのであろうか。感情を表出しないことが大人に近い、成長の証であるというような誤解があるのだろうか。表出することが目立つことを意味し、それを嫌うのだろうか。

このようなことが多くの学級で本当に浸透しているとするれば憂うべきことである。どのような人間関係のクラスで自然な感情表出がされないのかを早期に明らかにし、感情表出の妨害物を駆除する試みが必要であろう。

3. 研究方法の問題

本研究は時代の比較をするために経験年齢がほぼ15年以上の教師に尋ねたが、彼らの数人がいみじくも指摘したように、観察者である教師自身が徐々に年齢を重ね、感情の持ち方も変化していることが子どもの感情の推測の仕方に影響を与えていることも考えられる。若い教師の時は一般的には子どもへの働きかけも多く、子ども自身もそれによって活動的で感情表出も豊かになることが多い。しかし、年を経るに従って、そのような働きかけが減少し、子どもたちも感情的に平板な状態になるかもしれない。また、毎年、同じ様な年齢の子どもを見つめていても、観察者の年齢が上がることで認知の仕方が異なってくることもある。ここで報告された子どもの感情の変化は観察者である教師の変化も含み込まれたものな

のである。

感情の時代的变化を知るためのもっと適切な方法が探索される必要がある。それは実はこの面接の中でも少し話題になった。学校に残された以前の子どもたちの文集や詩集から彼らの感情を推測するのはどうかとの意見もあったが、筆者のこれまでの検討ではそれらの資料は遠足や運動会とった紋切り型の楽しい思い出を綴ったものが多く、ネガティブな感情はあまり表出されていない。もっとインフォーマルな友だち同志の交換日記のようなものがよいという助言もあった。確かにそのような資料は魅力的だが、それをどのようにして探し出すか、さらにプライベートなものを研究資料として使用する許可が得られるかという問題がある。しかし、今後、子どもたち側の資料に基づく分析が必要なことはいうまでもない。

引用文献

Hayamizu, T. 2002 From a culture of sadness to a culture of anger: In pursuit of mechanism that has brought about this change. *Nagoya Journal of Education and Human Development*, 59-68.

巖倉奈々 2001 感じない子ども ころを扱えない大人 集英社新書

謝辞

本研究を実施するにあたり御協力いただいた小牧市教育委員会、校長会ならびに面接に御参加いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。

(2002年9月30日 受稿)

ABSTRACT

Changes in the emotions of pupils nowadays: Based on group-interviews with teachers

Toshihiko HAYAMIZU and Tomomi NIWA

The purpose of this study is to examine the changes in the emotions that took place in the pupils nowadays as compared to the pupils more than 10 years ago, the causes for such changes and future educational implications. Data were collected through interviews with veteran teachers. Subjects were 68 teachers from six elementary schools and six high schools, most of whom had over 15 years of experience in instructing and caring for pupils. Firstly, a simple questionnaire was administered on the subjects to determine the changes in the emotions between the pupils nowadays and the pupils in the past. The following six aspects of emotions were examined, anger, sadness, joy, fear, surprise and fun.

Next, Several teachers in each school were interviewed as a group by the first author. They were asked to respond to the following questions: (1). What are the characteristics found in the emotions expressed by pupils nowadays? (2). What contribute to such characteristics? (3). In terms of educating the pupils, what should the schools do to help pupils better develop their emotions?

From the interviews, basing on the teachers' daily observations of pupils, we could conclude the characteristics of the pupils' emotions as follows. (1) Pupils nowadays were more likely to feel angry than pupils in the past, whereas the former were less likely to have and express sadness, joy, fear, surprise and fun than the latter, (2) The characteristics of the emotions among pupils were mainly determined by parents and culture, (3) Group activities, such as, field study and athletic club, would have a positive impact on the pupils' emotional growth.

Key words: changes in emotions, teachers, pupils nowadays, interview.